

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 7 日現在

機関番号：34310

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820069

研究課題名（和文）カリフォルニア州トゥール・リヴァー部族の形成過程に関する研究

研究課題名（英文）Research on the history of the Tule River Indian Tribe in California

研究代表者

野口 久美子 (NOGUCHI KUMIKO)

同志社大学・アメリカ研究所・助教

研究者番号：00609571

研究成果の概要（和文）：本研究では、2カ年にわたる現地調査と文献調査の結果、19世紀末から20世紀初頭のトゥール・リヴァー保留地において、複数部族からなる先住民部族集団が単一の政治形態を形成する過程と、それに伴う部族内経済格差の構築過程について歴史的分析を加えた。結果として、現代の部族社会と経済発展の基礎となる再組織法型部族政府（トゥール・リヴァー部族政府）が、いかにして構築されたのか、その歴史的背景が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This two-year project discloses the process of political and social reorganization and economic disorganization of an inter-tribal reservation, the Tule River Reservation, during the late 19th century and early 20th century. The project relies upon a wide range of resources collected in fieldwork and library research in the U.S. In the end, this project illuminates how the Tule River tribal government was organized under the Indian Reorganization Act of 1934, followed by political empowerment and economic development in the 21st century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：西洋史

科研費の分科・細目：ヨーロッパ史・アメリカ史

キーワード：アメリカ史、アメリカ先住民史、カリフォルニア州、部族史、

### 1. 研究開始当初の背景

1980年以降、アメリカの主要大学における北米先住民学部（ネイティブ・アメリカン・スタディーズ、以後NAS）の発展によって、先住民史研究における部族史研究が活発化した。NASは、過去500年にわたり先住民文化を迫害してきた「植民者」としての移住者と、「被植民者」としての先住民との関

連性を軸に歴史解釈を行う、いわゆる脱帝国主義（Decolonization）的歴史観を提唱した。それは、「アメリカ的民主主義」の中で「ステレオタイプ化」されてきた先住民像を批判し、多様な先住民社会の現状へ関心を促す一方、国民国家の歴史を超えた世界史の中に、先住民史を位置づける試みである。歴史上繰り返されてきた帝国主義システムに対する

先住民史からの批判的解釈である、NAS の歴史研究理論が提供するものは、1) 帝国主義的歴史記述の批判的踏襲として、先住民の視点を取り入れた歴史解釈（国史の一部ではなく部族史の集合体としての民族史／ステレオタイプ化ではなく多様性への認識）と、2) 先住民社会の経済的、政治的地位向上のためのアクティビズムである。このような背景のもとで、脱帝国主義的な個別研究と先住民の多様性を示す実証研究の手段として部族史研究への需要が高まった。

新たな学問分野としての部族史研究の中で、カリフォルニア州に居住する先住民の部族史の蓄積は少ない。それは同州の多くの先住民が、条約による連邦保留地を所有せず、また急激な人口減少（19世紀初頭に経験した伝染病、戦争、ゴールドラッシュ、強制移住の影響）に直面し、残った先住民は都市化とアイデンティティの周辺化により、アメリカ社会の中で「見えない」存在であったためである。

一方、1970年代に活発化したインディアン・ムーブメントを契機に、同州の都市インディアンに関する歴史学的、社会学的調査が発展したが、同州内に居住して部族生活を保持している先住民に関しては、研究の蓄積が遅れている。アメリカ北西部や南西部に居住する部族に関する豊富な研究と比較すれば、カリフォルニア州の先住民部族に関する研究蓄積の少なさは明白である。それは、北米先住民の社会と文化に対するステレオタイプ化の負の遺産であるとも言える。

本研究では、その研究課題自体が、申請者の博士論文研究を踏襲しつつ形成されている点（人脈、収集史料など）、またカジノ規制法案に伴う部族史研究へのニーズに答え、部族社会に対する歴史学の学問的貢献とその意義（NAS理論の実践）を提示するため、トュール・リヴァー部族の事例を取り上げる。これまでトュール・リヴァー部族を扱ったものとして二つの研究がある。一つは、同部族と、スペイン、メキシコ、アメリカと続く帝国主義諸国との歴史的関係性を描いた最初の通史を提供し、複数の部族が保留地へ強制移住させられた後、その社会、政治、経済、文化的境界を取り払い、トュール・リヴァー部族として再建を果たした戦略的過程を描いている。（Kumiko Noguchi, *From Yokuts to Tule River Indians*, 2009）。またもう一方は、過去の裁判記録の分析より、同部族が受けてきた法的不当性を明らかにし、同部族による後の補償運動を導いている（Gelya Frank & Carole Goldberg, *Defying the Odds*, 2010）。

両研究は先住民部族の経済的需要と歴史学における学問的価値の併存を目指した、NASの実証研究と位置づけることができる。

こうした中で本研究は、トュール・リヴァー部族の設立について、保留地における部族の「再建」（前出、Noguchi, 2009）ではなく、伝統的部族形態の「維持」としての側面に注目しつつ、新たな観点から考察を加える。「再建」からの視点は、現代アメリカ社会における先住民の多様性と政治的存在感を立証し、脱帝国主義的観点から先住民史を再検討した点では有意義であったが、一方で、特定の先住民部族を、移住前の土地基盤と社会形態から切り離す作業であったことは否めない。故に本研究は、同部族を構成する成員の、移住前の居住地、社会、政治体制（「伝統的」土地基盤）を探り、トュール・リヴァー部族の再建過程の中に組み込まれている「伝統的」社会形態の存続状況を分析する。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、アメリカ合衆国（以後アメリカ）カリフォルニア州中部の先住民諸部族のために、連邦政府によって設立された二つの地域：テホン保留地（1851-1854）とトュール・リヴァー保留地（1854-）に居住する（した）先住民の歴史的関連性を探ることである。特に、現在トュール・リヴァー保留地に居住するトュール・リヴァー部族と、テホン保留地に居住していたチュバチュラバル部族の血縁的、社会的、政治的継続性について、指導者ホセ・チコの動向に注目し、トュール・リヴァー部族史を再検討する。また本研究は、近年、アメリカで大きな議論を巻き起こしている、先住民カジノの設立可能地域を巡る、トュール・リヴァー部族と、連邦、州、周辺地域間の議論に対して、歴史学の観点から学術的視座を提供する。

## 3. 研究の方法

本研究ではテホン保留地からトュール・リヴァー保留地に移住した指導者ホセ・チコに注目し、そのリーダーシップの構築、維持、終焉過程について、以下の4点の分析を行う。尚、トュール・リヴァー保留地は1872年に現在の地に移動したため、便宜的にそれ以前を第一次、以後を第二次保留地期と定める。

- 1) テホン保留地の設立過程：連邦政府と周辺部族との移住交渉と移住過程（1851年）。
- 2) テホン保留地内における部族社会、政治、経済構造：指導者、ホセ・チコの指導力の構築過程とその諸相（1852年～1854年）。
- 3) テホン保留地からトュール・リヴァー保留地（第一次）への移住過程：保留地におけるパワー・バランスの変化とホセ・チコの指導

力の再構築過程（1855年～1871年）。

4) トュール・リヴァー保留地（第二次）への移住過程：ホセ・チコの指導力の弱体化、第二次保留地における新指導力の構築と、旧指導者としてのホセ・チコの役割と影響（1872年）。本研究は、これまで収集したアメリカ内務省の公文書と地元歴史家や保留地関係者による未刊行史料（覚書）、テホン保留地とチュール・リヴァー保留地の居住者とその子孫の記憶と語り、血縁データ、そしてセンサス資料など多様な歴史資料を用い、NAS理論に則った部族史研究方法を軸として研究を遂行する。

#### 4. 研究成果

本研究では、2カ年の研究期間内において3度の現地調査（於合衆国）と国内外における文献調査を行った。その結果、次の2点の成果を挙げた。まず1) チュバチュラバルとヨクートがテホン保留地、チュール・リヴァー保留地へと移住を強要されるに至った歴史的背景を明らかにする事により、チュール・リヴァー保留地が、カリフォルニア州中部に居住し、多様な文化的背景を持つ複数の先住民部族が共存する土地となったことを歴史的に立証した。次に、2) 複数部族による共存関係は、保留地において、チュール・リヴァー部族としての政治的、社会的、言語的な同一アイデンティティを形成する一方で、保留地内における経済格差を生み出した過程を歴史的に立証した。新たな部族組織の構築と部族内経済格差という、チュール・リヴァー部族の抱える矛盾したアイデンティティの構造は、1934年に成立したインディアン再組織法による部族政府の構築過程においてあぶり出された。本研究が挙げた1) 2)の成果は、チュール・リヴァー部族の設立過程を明らかにすると同時に、同部族が、現代の経済発展と部族自治の基礎となる、再組織法型部族政府を設立するに至った歴史的背景、さらには、再組織法の理念と現実の矛盾を提示することとなった。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

1) 野口 久美子「拡大する「母なる大地」-土地の信託化をめぐる先住民鍛冶の経営のポリテクス-」（査読あり）『同志社アメリカ研究』49(2013), 65-86.

2) 野口 久美子「インディアン再組織法の矛盾：チュールリヴァー先住民保留地における『家畜協会』設立の理念と現実」（査読あり）

『史苑』72-2(2012), 7-28.

3) 野口 久美子「カリフォルニア州チュールリヴァー先住民保留地における部族形成過程に関する歴史的考察」（査読あり）

『同志社アメリカ研究』48(2012), 77-104.  
<http://doors.doshisha.ac.jp/webopac/bdyview.do?bodyid=TB12414463&elmid=Body&lfname=012000480004.pdf&loginflg=on>

〔学会発表〕（計4件）

1) 野口 久美子「書評『Indigenous Women and Feminism, Politics, Activism, Culture』」同志社大学アメリカ研究所部門研究1（2012年8月3日）於同志社大学

2) 野口 久美子「ネイティブ・アメリカンの現在-部族自治と経済発展-」大学女性協会京都支部総会(2012年6月14日)於ウィングス京都.

3) 野口 久美子「インディアン・ニューデイル政策とチュールリヴァー保留地の人々：『承認された』部族自治と先住民文化のはざままで」関西アメリカ史研究会（総会）(2012年1月29日)於キャンパスプラザ京都.

4) 野口 久美子「北米先住民社会における部族形成過程の考察-帝国主義下におけるチーフの役割と先住民のディアスポラ-」日本比較文化学会（関西支部12月例会）(2011年12月10日)於同志社大学.

〔図書〕（計0件）

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

野口 久美子 (NOGUCHI KUMIKO)  
同志社大学・アメリカ研究所・助教  
研究者番号：00609571

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：